

Title	英語における”Actual Sense”の研究 : 序説
Author(s)	森澤, 三郎
Citation	大阪外国語大学学報. 2 p.1-p.26
Issue Date	1953-07-20
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80097">https://hdl.handle.net/11094/80097</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 英語における “Actual Sense” の研究

## 序 説

森 澤 三 郎

### Introduction to the Study of “Actual Sense” in the English Language

Saburo MORISAWA

#### SUMMARY

In this article, of which the introductory pages are here presented, the writer wishes in the first place to bring into prominence what he calls the “Historical & Technical Senses of General Word”, which form the most fecund part of what he calls the “Actual Senses of General Words”, the definition and illustration of all which occupy a major portion of the space allotted to him in this volume.

Incidentally he tries to reconsider, or at least to re-state, the position of Business English (comprising, as it does, many Technical Senses above referred to) in the whole picture of the study of the English language. This latter motive is largely responsible for the preponderance, throughout this introduction, of illustrative words and expressions related to international trade.

To clarify the writer's approach to the subject, what he terms “Actual Sense” is subjected to such classifications as:

Actual Sense	{	General Sense	{	Historical Sense
		Special Sense		Technical Sense
				Literary Sense
				Regional Sense
				Etc.,

and, from a different angle,

Actual Sense	{	Literal Sense	{	Historical Sense
		Figurative Sense		Technical Sense
		Slided Sense		Regional Sense
				Etc.,

all subdivisions of which are explained with examples in their proper places.

Of the various factors that are instrumental in causing changes in the meaning of

words, the greatest emphasis is here given to those which are, so to speak, external and factual, or, in other words, conditioned by things and circumstances.

Taken altogether, this introduction may be regarded as an attempt to draw a sketchy plan of a structure for storing, if not brilliant gems, at least useful corundums, which are yielded from the quarry of the English language.

For collecting the materials to be preserved in this storehouse, the writer looks forward with great pleasure and keen expectation to receiving kind support from generous people in different fields of study and widely diversified walks of life, who, through community of interest in the English language, may be disposed to provide him with interesting bits of information.

He also hopes that the aim of international understanding and cooperation may be promoted by incorporating into language study more of the factual side, as exemplified by Area Study, in addition to what Falstaff calls "air".

## (I) Special Word

“Actual Sense” とは、以下順次に説明しようとする意味においての「General Word の General Sense, 及び Special Sense (の大部分)」を總括する名稱である。

以下本稿において特に断ることなく **Special Sense** (特殊語義) という時は、「特殊語の語義」を意味するものでなく、「一般語の特殊的語義」を意味する。何となれば特殊語 (Special Word) が特殊語義を有することは餘りに當然であつて重語的 (tautological) とも稱し得るからである。ただしこのことはいうまでもなく、特殊語の定義如何にかかる。

一般語 (**General Word**), 特殊語 (**Special Word**) という區別を立てる時、その基準を何處に求めるべきか。ここには極めて大まかに、時間的、空間的という角度から考えて、一般語の要件を次の二點 (細分すれば三點) に求めることとしたい。

(1) 時の上からは現用 (current use) の語であること。

(2) 所の關係からは

(a) English-speaking people の社會の各層、活動の各分野において用いられるか、少くとも理解される語であること。

(b) English-speaking world の各地域を通じて用いられるか、少くとも理解される語であること。

(註1) およそ言葉が行われる以上、時のみの中で存在し得るものではなく、従つて current という言葉も屢々場所的な implication (含蓄) を持つが、本稿に關する限り、“current use” を時間的に「現用」とい

う意味に限定したい。

上の要件に合致しない語を特殊語 (Special Word) と名付けるとすれば、Special Word の中には次のものが含まれる。

(1) 時の関係からは Obsolete (or Archaic) Word を主体とし、一方それと反対に発生後餘りに時間的餘裕の少いために一般化するに至らない言葉も含まれるであろう。

(2) 「所」の関係からは

(a) 或る専門分野に限つて用いられる Technical Word を中心とし、或る職業の中で用いられる Vocational Word, 或る社會層の中でのみ行われる Cant, Jargon, またそれに類する Word.

(b) English-speaking world の極く一地方に限つて行われる Regional Word.

(註2) (i) Cant, Jargon というような語は時に diplomatic cant とか scientific jargon というように轉意で用いられることもあるがここでは勿論それは論外である。

Jargon と云えば slang を連想することが多いであろうが、slang には jargon の意味の他に language of a highly colloquial type の意味もあり、この後の意味における slang (および colloquial) は特定の社會層に固定されたものというよりは、むしろ「speaker と hearer (時としては writer と reader) の間の相互關係に依る所の多い、表現上の variation」として (別言すれば style の問題として) 考えたい。

概して formal prose またはこれに近い style が普通の communication の上から最も一般性を持つと共にまた多くの場合よく整備したものであり、これに對して colloquial や、slang は屢々不用意で明瞭を欠いていることは、jargon に屬する Word が General Word に比して一般性や明瞭度において劣つていゝのと一脈相通する所はあるが、colloquial や slang のそうした不備は Sentence 全体における省略 (ellipsis) とか環境的限定 (situation context) への依存などが主因をなしており、單に語義という角度から論じ得ない要素が重きをなしているの、これまた本稿においては論外としなければならない。

(ii) Regional Word について少しく補足すれば特定の地域に行われる言葉とは、たとえば U. S. でスペイン語との接觸の多かつた地方で tip (心づけ) の意味に用いる lagniappe (>Sp. la ñapa), スコットランドで小川 (rivulet) の意味に用いる burn などがその category に入る。

また Regional Word というような呼方をすると dialect との異同が問題となるであろうが、dialect と云えば General Word の dialectical sense も問題となり、且つまた言語學的には別種の意味を持つことも多い。“dialectal word” と云えば略々ここにいる Regional Word と一致するかのようであるが、dialectal word には corruption (轉訛) による variation に過ぎないものも考えられる。Regional word としては原則としてそうした單なる variation などは含まない。より狹義のものを考えたい。

## (II) Special Sense

次に語義の一般 (General), 特殊 (Special) を分つのに、General Word と Special Word とを區別するに用いた基準を援用することが出来る。これを検討するに先立つて觸れておきたいのは Word と Sense とを相關的に取上げる時に注目される次の事實である。

Special Word はその性質上おのずから（原則として）Special Sense のみを有する。

General Word は、その大部分が General Sense のみを有するが、それと共に或るものは Special Sense をも併せ有する。

前に (1) の中で断つたように、本稿で「特殊語義」というのは、Special Word の持つ Special Sense ではなくて、General Word の持つ Special Sense である。

（註3）“Special Word の Special Sense” というような言い方をすれば、Special Word が持つ所の Special Sense が更に分化して生じた意味（例えば或る分野の Special Word が他の分野に應用せられて原意から外れて行く場合）とも受取られ得るが、上に云つてゐるのは Special Word が本来持つ所の Special Sense である。

さて、時間的關係に基ずく語義の區別を先ず取上げよう。(1) で云つたように General Word は原則として current use (現用) のものであるが、その或るものは obsolete use をも兼ね備えている。かような General Word の有する Obsolete Sense は當然上に云う Special Sense に屬するが、これを Obsolete Word が（その性質上當然）有する所の Obsolete Sense と區別して、本稿に關する限り **Historical Sense** と名付けることとする。

（註4）断るまでもなく、ここに historical というのは「史學」という意味における history の形容詞ではなく「過去の事象に關連する」という意味での historical である。もし前者の意味であれば、それは「史學」(historical study) という分野において特に與えられてゐる Sense でなければならぬ。従つてそれは次にいう Technical Sense に屬すべきものである。

それと同様に General Word の technical use に於ける語義を **Technical Sense** と名付け、General Word の regional use における語義を **Regional Sense** と名付けることとする。

（註5）Living language は常に流動 (flux) の状態にあり、矛盾に満ちたものなので、割り切つてしまへない點が多いが、General Sense と Special Sense (例えば Technical Sense) との區別についても嚴密に線を引くとは素より望み得ない。

例えば Composition という Word を取つてその (1) 構成 (2) 作文 (3) 作曲 (4) 構圖 (5) 植字 (6) 素質 (資性) (7) 混合 (8) 混合物 (特に漆喰の一種) (9) 和解 (妥協) (10) 示談金 (濟務の一部返償金) などの語義の中で何れを General とし、何れを Special とすべきか。假に (1) ~ (3) 乃至は (1) ~ (4) までを General としても、それは普通人の生活體驗に近いからというだけの理由によるものであつて、本質的には (5) と區別する理由はない。また (6) は compose という verb に對する抽象名詞、(7) は compound に對する抽象名詞たる點で、ある見方からすれば General Sense の性質を多く有する。(9) は同じく compound の抽象名詞であるが、用途の限られてゐる點で Special Sense に入るべきであらう。これらに比しては (8), (10) 等は Special Sense の性質が更に多いものと認むべきであらう。いずれにせよ、その關係はあくまで相對的である。

また最初は Special Sense であつたものが、時と共に普通化して General Sense になつてしまうこと

も多い。例えば customs (關稅) という言葉は、もともとこの税が custom (慣習) によつて國王に屬したことから起つたといわれる。その昔 1275 年 Edward I が關稅に關して一定の基準 (scale) を設け、*"Ancient Custom"* (英人に對する關稅), *"New Custom"* (外人に關する關稅) の別を設げた當時にあつては、*"Customs"* のこの意味は Technical Sense であつたとしても、今日においては General Sense になつてしまつたと見るべきであらう。

### (III) Historical Sense

卑近な一例として husband の noun use について N. E. D. の定義を求めると (他の多くの定義の中の二項目として) (i) The master of a house, the male head of a household (一家の主人, 男子たる家長) が與えられ、次に (ii) A man joined to a woman by marriage (結婚によつて女と結合された男) という説明があり、前者は中世以來の用例があるが、今 obsolete であると斷つてゐる。

(註6) なお Wyld の Universal English Dictionary に依れば、ほぼ N. E. D. の (i) に相當する定義を obsolete or archaic としていて、obsolete, obsolescent, archaic などの區別が判然たるものではあり得ないことを示している。

この場合において中世以來の傳統的用例における husband の意義〔即ち (i) の定義〕が本稿にいう *"Historical Sense"* であることは云うまでもない。

husband という語のこうした Historical Sense は現代の我々に取つても重要なものである。

およそ我々は現代に生を享けているが、それにも拘らず、我々の想念が時として過去に向うことは極めて自然的である。その際思考の對象となるものは過去の事物であり、それらの事物を指す言葉が過去と現在とによつて意味内容を異にする場合には、その區別について十分な認識がなければ正確な理解は期し難い。換言すれば我々は General Word についてもその Historical Sense を無視するわけにはゆかない。

ひるがえつて表現の面から云えば、ここに考えられている husband を意味するために最も順當な Word は husband であつて他の語ではないということを認めねばならない。

これとやゝ趣を異にする今一つの場合を考えよう。例えばここに write という言葉がある。Francis Bacon が *"Of Studies"* の中で

*"Reading maketh a full man, conference a ready man, and writing an exact man."*

「讀書は充實した人を作り、會談は當意即妙の人を作り、轉寫は正確な人を作る」

という時、この writing は handwriting や composing の意味ではなく、copying の意味であるとせられ、その意味に當る定義は N. E. D. にも obsolete として與えられている。ところでこの *"writing"* は Bacon が十六世紀末にあつて、Studies という普遍的な問題を論ずるに

當つて、當時の（既に稀用に歸しつつあつた）語意に従つて使用したもので、かりに今日の著者が同様の問題を論じようとする場合には恐らくこの言葉を用いることはなく、今日用いられる equivalent（同意語）をもつてこれに代えるであろう。

従つて writing のこの意味は、古典として Francis Bacon を正しく讀もうとする者には必要であろうが、現代人が相互に意思や思想を傳達しようとする場合にはさし當つて必要のないものである。

念のために、もう一つの例を取れば、starve という語は、語源的にはドイツ語の sterben と語根を等しくし、元々單に to die の意味であつたものが、「徐々に死んで行く（to die a lingering death）」というような含みを持つに至り、更に一轉して General Sense としては「餓死する（to die of hunger）」の意味に大体固定することとなつた。この General Sense については、中世紀における經濟組織の幼稚さや交通不便のために饑饉による死が多かつたために、省略的の用法からこの轉意を生じたといわれる。一面原意としての單なる “to die” の意味は今日では地方的または比喩的の用法を除いては略々廢絶に歸したと言つて良いであろう。

husband によつて代表される Historical Sense の例を Historical Sense (A) とし、write 及び starve によつて代表されるものを Historical Sense (B) と名付けると、obsolete である點では二つながら同様であつても、(B) においては Obsolete Sense は殆んど全く General Sense に地位を譲り（starve の場合には、歴史的發展の過程から云えばむしろ特殊語義であるはずのものが、General Sense の位置に代位しており）、もし今日の speech または writing で表現しようとする場合に “write”, “starve” という語を用いるとすれば殆んど必然的に對者に誤解を與えるほどに、その obsolete use における語義と General Sense との間には gap を生じているに反して、Historical Sense (A) においては、obsolete use の語義によつて cover される物（または事）を指すためには、やはり General Sense で用いる語（上掲の例では husband）に頼る他なく、その點で Historical Sense (A) は General Sense と密接な連續性（continuity）を有するものということが出来る。

（註7）なお Historical Sense (A) はその性質上、現在の思考に投影するする場合が多いが、本稿においてはそれは主として一般的な意味における傳統の重壓という事實の面での現われだという見方から、語義の上では二次的なものとして扱うこととしたい。

#### (IV) Actual Sense

Historical Sense において (A), (B) を區別したのとほぼ相似た基準によつて、Technical Sense, Regional Sense についても、General Sense との連續性の濃淡、輕重によつてそれぞれ (A), (B) の區別を考えることが可能である。そうした各 Sense の中で (A) に屬するもの

は現代の一般人が現實的に使用しまたは受容する Sense であるという考えから、これを綜合して (General Word の) “Actual Sense” (または “Effective Sense”) と名付けたい。

これを表示すると次のようになる。

Actual Sense {  
i. General Sense  
ii. Historical Sense (A)  
iii. Technical Sense (A)  
iv. Regional Sense (A)  
v. Etc.

(v. の Etc. は單純に分類し難いものを指す。また、Historical Sense 以外においては (B) に當るものは比較的少い。従つて以下の敘述においても (B) に言及すること稀である。)

更に一步を進めて言えば、この Actual Senseこそ English words の種々の語義の中で、Living English にとつて必要な語義であるということが出来る。

(註8) こう言えば直ちに二つの反問がなされるであろう。—— その (i), Technical Word は Living English Vocabulary に入らないのか、その (ii), Special Sense (即ち Historical Sense, Technical Sense, Regional Sense, etc.) の B-group は Living English 研究の對象とならないか——である。

これに對しては一應次のように簡単に答えておきたい。

(i) 我々は廣い意味での社會の構成員として、社會一般に共通な常識を有する。Vocabulary の面では、概してそれは General Word に屬する。他面、我々は社會における分業の結果として特定の分野、特定の活動部門を擔當する立場にあること——換言すれば、より制限された特定の社會の構成員となること——が多い。この場合には、その狭い社會に共通な常識がある。jocose な言い方をすればコンモン・センスに對する専門センスとも言うべきものである。Vocabulary の面では、それが Technical Word を中核とする Special Word である。こうした Technical Word, etc. はその分野の人に取つては General Word に準ずるものであり、彼等に取つてはやはり “Actual Sense” を持つものと見てよいであろう。

Technical Word とは似た立場にあるやゝ特殊な例として Literary Word が考えられる。ここに言う Literary Word としては、「文學の作者及び愛好者が、言語の關する限りにおいて一種の élite (選ばれたる者) として特別な社會的階層をなし、普通に考えられる General Word のワケ外において用いる Special Word」が先ず考えられるが、更にこれとは同一性質のものとして、一般に讀書階級の間に行われる Special Word をも含めるが適當であろう。こうした Literary Word が文藝社會、並びに一般讀書階級に屬する者の立場からは General Word に準ずる位置を占め、彼等に取つては “Actual Sense” を有することも、Technical Word について述べた所と同様である。

(ii) Special Sense の B-group 中でも語義の歴史的發展の link をなした Sense は語學の研究教授の上に極めて價値のある對象であり、實際的な助けになることは勿論であるが、Living English Vocabulary というものを考える時には、それは直接の對象とならないことも等しく明かなことである。のみならず、derivation の研究に熱心な人が語義展開の途上において嘗て存在した過渡的な語義を General Sense の上に過重に投影しようとする傾向を強く示す場合には、その弊は、時として folk etymology に敢て譲らないものがある。



以上述べて来た語および語義の問題を現行の英語教育の課程に對應させて考えると

(i) 中 學 校

大体において General Word の General Sense に始終する。

(ii) 高等學校

(a) General Word の Special Sense, (殊に Historical Sense) が幾分加味される。

(b) 職業教育に重きを置く高等學校ではいくらかの Special Word (特に Vocational Vocabulary としての Technical Word) が授けられる。

(iii) 大 學

Technical Word, Technical Sense の比重が加わり、また英語一般に關する知識の増加と共に Historical Sense, Regional Sense の面についての知識も加わる。また専門の分野によつては Obsolete Word, Regional Word 等に對する理解も加わるであろう。

ここに大學について云つたことは後期及びそれ以上の課程に特にあてはまる。

## (V) Actual Sense と Vocabulary Control

通觀すれば General Word および自己の屬する分野の Special Word の中で、比較的効率の高いものを修得し、前者についてはその“Actual Sense”にもほぼ通するということが、各人の修得すべき Living English Vocabulary の外廓と内容をなすもので、この意味において Vocabulary Control の上からも Actual Sense の検討は不可欠である。Vocabulary の選定に當つて言葉の意味に對する考慮が十分に拂われなければ、その Word List は薄弱な地盤に立つものと云う他なく、極言すれば意味の検討無くして Vocabulary Control はあり得ない。

(註9) Thorndike 氏の system, Horn 氏の system, またそれらを基礎にする Faucett, 牧兩氏の system による Word List は、その英語研究上に於ける有用性は十分認められるが、それと同時にまた相當批評の餘地を残している。

例えば Fries 氏等の指摘するように、われわれの生活に最も緊要な言葉が必ずしも frequency に基づく count に大きく現われるものではないということがその一つである。しかしこれはそれらの Word List が太体 reading vocabulary という基準から作られたという事實と關連しており、この點の修正は素材の選擇方針に變化を與えるることによつて達成し得るものと思われる。

それよりも更に重大な盲點というべきは、言葉を形の上からのみ捕えて、意味(用法)の問題に立入ることが不十分なことである。勿論意味の問題を取上げることは Word List 作製の仕事を著しく複雑ならしめることは明かであるが、Word List が十分にその目的を達するためには、この方面にも周密な検討を要することは、また自から明かである。

## (VI) Technical Sense

**Technical Sense** とは、言葉が或る特殊な専門分野で與えられる特定の制限または擴大によつて生ずる特殊な語義と解するのが順當であろうが、ここでは或る特定の活動分野における同様の意義變化（例えば Vocational Word に對して Vocational Sense ともいふべきもの等）をも、之に準ずるものとして包含させたい。

（註10）勿論 Technical という語それ自体にこのような廣い意味があるというのではない。その見方からすれば上に云ふ意味での Technical Sense は misnomer とも云えるのであろう。しかし順當な意味での Technical Sense と、ここにそれに準ずるものとして扱おうとする Sense との間には或種のつながりがあることは認められるであろう。その繋りとは何か。曰く、即物的、即事的な契機による意味の擴大縮小である。

このような説明にも拘らず、なお“Technical Sense”が不當であるとされる方々は、この category を“Technical (plus  $\alpha$ ) Sense”として理解することに暫く御同意を頂きたい。

前項 (III) に述べた Historical Sense が、時間的な擴がりを取入れたために General Word に與えられた特殊化によつて生じた語義であるとすれば、それに對するものは當然空間的な擴がりを取入れた語義ということになる。これは事物（現象）の時間的な分布を研究する「歴史」に對する空間的な分布を研究する「地理」或は「博物學」の關係を連想させるが、現實の問題としては多くの場合この兩者（時間的及空間的契機）がからみ合つて提起されることは周知の通りで、「歴史地理」(historical geography)や進化論の重要性はこれに因つてゐる。従つて語義の検討に當つて時間的契機とか空間的契機とかいうように單純に割切つてしまうことは事實上困難である。

（註11）一般に「英米の usage の相違」として空間的に取上げられている中にも時間的な差異とも見得るものが多い。たとえば米の current use における bully (= [英] first-rate, excellent), a deck (= [英] a pack of cards) や, an apartment (= [英] a flat) はそれぞれ Shakespeare や Pepys にその用例がある。

また restraint on trade という expression は Adam Smith の Mercantilism 批判以來、主として「自由な通商に對する各國政府の干涉」の意味に用いられたが、（もつとも The Wealth of Nations の中での Smith 自身の用語は“restraint upon importation”である）米國では「trust から加えられる、自由な取引への妨害」を restraint of trade という言葉で現わし、Sherman Antitrust Act の通過以來（その施行の實狀には時によつて寛嚴の差はあつたか）この意味の restraint of trade を積極的に不法なものと認めるに至つた。

この例に見られる restraint という言葉の内容の變化は時間的のものと思うべきか、空間的のものと思うべきか。恐らくこの場合は寧ろ米國の特異な環境に重きを置き、後にいう regional study の立場から見るのが妥當であろうが、なおここに説いている Technical Sense とも深い關連をもつことは當然である。

「時」に對して「所」を考える時、それは當然地域 (region) の問題につながつて行くが、ここにはそうした空間的「ところ」よりも、われわれの思考の對象となる「領域」乃至は「活動範圍」という意味での「ところ」を先ず問題として行きたい。即ちここには先ず Technical Sense (又はそれに類似した Sense) を問題として行きたい。(いうまでもなくこれは極めて便宜的な整理法であるが、語學的對象の量的考慮は、こうした便宜的な整理を是認させるであろう)

さて前にも述べたように、Technical Sense という言葉によつて、われわれは人間の活動の各分野における特殊な事象、専門的な諸條件によつて、擴大、制限、または特殊化された語義を意味することとした。この主旨を明かにするため貿易用語から二三の例を引くこととしよう。

(a) まず **Business English** という expression を取上げて見よう。市河博士編の英語學辭典には

Business English = pigeon English

と、あつさり片付けてある。Business English を専門とする人の中にはこれをもつて一つの insult と考えている向きもあるやに聞く。しかしながら同辭典の中に説明された “Business English” は一般社會の通念における “**Good English + Good Business**” としての Business English ではなく、専ら英語學の立場においての “Business English” であるものと想像される。社會通念における Business English は (Good Business の目的を達するために business technique, legal technique, business psychology を内包し、その意味で特殊化した面はあつても) 概して normal English であつて特に英語學的にこれをあげつらう必要のないものである。

(註12) という意味は「英語學辭典」以外の有力な文獻において Business English という言葉が pigeon English (pidin English) の意味に “英語學的” に用いられているという確證を持つていない。實は寡聞にしてそのような例を知らない。

しかし或る専門分野で、特定の語を一般社會の通念と違つた意味に使うことは極めて普通のことである。たとえば American という言葉は一般の通念としては「アメリカ大陸に住居するヨーロッパ系の人間。特に合衆國市民」を意味するが、人類學の用語としては「アメリカ大陸の原住民」を意味する。あとの意味は即ち Technical Sense で、一般の通念とは異つてゐる。

なお現在のようにヨーロッパ系の人間がアメリカに土着して優勢を極める前には、彼等は自から English とか Dutch とか、Spanish とかいう風に考えていたので、原住民 (即ち現在の呼方では American Indian) を American と云つた。この見方からは、あとの意味は Historical Sense である。

Technical Sense においてわれわれが特に問題とするのは、程度の差こそあれ、上に言つたような特殊の條件に基ずく General Sense からの乖離の事實である。

(b) **Converter** (または convertor) という言葉は General Sense では one who or

that which converts であるが、商業上（殊に米國での）特殊な意味としては a merchant who buys unfinished fabrics, etc., and have them dyed, bleached, etc. (Webster's New College Dictionary, 1950) の意味となる。

(註13) The American College Dictionary は converter を one engaged in converting textile fabrics, especially cotton cloths, from the raw state into the finished product ready for the market, as by bleaching, dyeing, glossing, etc. と説明している。これによると processor (加工業者) のような感じが強いが、必ずしも自から order processing (委託加工) を引受ける側に立つものとは限らず、却つて他の加工業者に加工させる場合もあるとすれば、この二つの定義の内容は事實上大差ない物と見ても 差つかえないであろう。

また日本の輸出業者が米國の converter と稱するものから註文を受取つた時、信用狀が（屢々複数の）實際上の買手によつて開設されるために、converter とは indenter のような貿易の仲介者という感じを持つ場合が多いが、上に述べた意味での converter が他の機能を併せて行うことは容易に考え得ることである。

(c) **consign** という言葉は General Sense としては hand over, deliver, transmit, send by rail, etc. の意味を持つが、特に「委託販賣する」意味となることも多い。貿易面では **consignment** は「委託販賣」「委託販賣品」ともなれば、單に「積送」「積送品」(=shipment) ともなる。従つて **consignor** (consigner) は「委託者」ともなれば單に「荷主」ともなり、**consignee** は「受託者」ともなれば單に「荷受人」ともなる。特に indenter に對し、かれを通じて發註する actual buyer の意味で consignee ということは頗る多い。

(註14) 商學、經濟學の立場からは用語に明確な概念規定があることは望ましい、というよりは寧ろ必要であり、この意味に於ては (i) 故鬼頭仁三郎教授が信用狀に關し opening bank と issuing bank との概念上の區別を立てようとせられ（「外國爲替講義」）、(ii) 虎尾正助教授が Immediate Shipment と Prompt Shipment を峻別してられる（「國際賣買とその契約」）のは十分理解し得ることであるが、“Actual Sense” という立場からは次のように考えたい。すなわち (i) については實際上そのような用法に従つていられるものは世界中の外國爲替銀行の中において稀有であるという理由によつて、(ii) については The New York Bankers' Commercial Credit Conference のような有力團體においても兩者を同意義に扱つていられるような實例を考慮に入れて、こうした區別には必ずしも従うことが出来ない。言うまでもなくこれは Living English においては usage を最も尊重するという事實から來るのである。

(d) **undelivered** un- という prefix の普通の用例から言つて、unsay, undo, unmask など反對の動作を表わし、また undelivered goods によつて「引渡しされぬ貨物」を表わすことは一般的な用法であるが、You undelivered on our order. という表現で時として short shipment の意味を表わすのは貿易上の特殊な用例というべきであろう。

(註15) 更に一二の例を加えると、to ship という verb は周知の如く、米國では「船積みする」「船で送る」という原意から轉じて、單に send の意味に擴張して用いられ、それに伴つて Bill of Lading も英國の Way Bill (陸運貨物引替證) をも意味し、F. O. B. (Free on Board) は英國流には「輸出港本船渡」を

意味するが、米國では「レール渡し」をも意味する。

これと反對に to land という verb も米國の（殊に軍隊關係の）用例では必ずしも陸揚げを意味せず、to tranship, すなわち「海上貨物の積換えをする」という意味の場合が屢々あり、舊 GHQ から日本の通産省や舊公團などへ發せられた命令の中の用例としては“Buoy X において、m. v. (=motor vessel) Y から land して後の指圖を待て。なお landing schedule を示せ”という言葉で、右の位置において「barge（傳馬船）へ一應積取つて積換えのために港内に待機する豫定を示せ」ということを意味した場合が往々あつた。

言うまでもなくこのような語解を招き易い表現は甚だ好ましくないもので good usage とは認め難いが、特殊な環境や緊急な事態の中で言葉が如何に歪みを與えられるかについての例證としては無意味ではなからう。

序ながら **berth** というような言葉も、普通に passenger の立場にある一般の市民としては「船（または汽車）の寢床」の意味が直ちに念頭に浮ぶが（もつともこの頃では bed ということが多い）、海語としては「錨泊位置」「繫留位置」「操船餘積」などの意味が普通である。

(e) **claimable** といへば普通には、「要求し得る」という意味を有するのは當然であるが、貿易上で claimable goods といつて、「要償の起り易い品物」（goods on which claims are likely to be made）の意味に用いるのも、やはり意味の擴大と云えよう。bills payable, bills receivable なども pay, receive する對象が bill でなくて cash である意味においてやゝこれに似ている。

(f) **cash terms** といへば普通「現金取引の條件」であるが、米國からの製造品の輸出などについては、一覽拂の荷爲替を取組む決済條件（勿論 L/C terms をも含めて）を cash terms といふことが珍しくない。

(g) **private draft** が「信用狀に基すかぬ爲替手形」を意味するのは銀行の semi-public としての性格から來ているであろうが、“private” という言葉自体から見れば相當のズレを見せている。

(h) **merchant** といへば貿易上では merchant shipper を意味し、一層特殊的には confirming house を意味する。“We are merchants, and do not place orders ourselves.”（「當方は merchants であるから自から發註は致しません」）というような、商社による立場の表明は、merchant = confirming house と解してはじめて理解し得る。

（註16）confirming house とは distributor (= indenter) のため注文を確認し金融面の面倒を見る商社通例 indenter である。が exporter に對し “Subject to confirmation by the confirming house” の條件で發註し confirming house の confirmation of order によつて成約する。confirming house は商業上は indenter の 代行者であるが自己の資金で商品の代金を支拂うので法律上は代理者とは言えない。（W. W. Syrett: Financing Trade Overseas）

日本の南阿貿易はこのような形式によるものが多く、London には40以上の有力な confirming house が

あつて南阿の indenter に協力している。單に London shipper とだけ言つて London confirming house を表わすことが多い。

(i) 語義の制限乃至特殊化の著例は何といても **Marine Insurance** (海上保険) に關する用語である。Lloyd's の S. G. policy form が近代的な海上保険契約の表現としては極めて不十分なものであることは蔽うべからざる事實であるにかかわらずなお傳統的に保持されているのは、その殆んど一言一句が過去において訴訟の對象となり、法廷における徹底的な検討を経てゐるため、契約當事者は事前においてその法律的効果を知り盡しているという利便に基ずくのである。海上保険に關する法律、判例、慣行は1906年の **Marine Insurance Act** によつて法典化されたが、この法律には特に附則として **Rules for Construction of Policy** (保険証券の解釋のための規定) を添える必要があつた。全部で十七項目に分れてゐるが、今假にその第十二項を取上げて見る。これは “Touching the adventures and perils ……” に初まる所謂 Perils Clause (危険約款) 中の “and of all other perils……” という語句の解釋に關するものであるが、ejusdem generis (同種限定) の原則に従い、その前に列擧した危険に類似する危険に限定しており、“all other perils” というような general words の字義的解釋からは出て來ない制限が付せられてゐる。

その他、この Rules に含まれるもの、含まれぬものを合してこの種の例外的な解釋は Marine Insurance につきまゝとつており、たとえば craft とは lighter, barge などの小船の總稱として専ら用ゐられ、pirates, rovers; pilferage, theft, thieves はそれぞれ内容や程度を異にするものと解釋せられる。また通例海上保険が cover するのは Perils on the Sea ではなく Perils of the Sea (= Maritime Perils) であるとされ、その内容如何は當然最も重要な問題となつてゐる。なおまた、Maritime Perils (Marine Insurance Act の用語) は Marine Perils と War Perils の雙方を含むものと解されるが、この Marine と Maritime の區別も甚だ technical なものといわねばならぬ。

## (VII) Technical Sense と Technical Word

本稿で Technical Sense という場合には General Word が technically に用ゐられた場合の語義を指す。(ただし technical ということは、單に専門分野についてだけでなく、特定の活動分野について云う場合をも之に準ずるものとして扱うこととした。前に述べたことの繰返しになるが Technical Sense とは最廣義には即事、即物的な契機、動因より結果する所の特殊語義と解したい)。

これに對して、特定の分野のみで用いられる語は Technical Word として一應考慮の外に置きたい。それは Historical Sense が Actual Sense に含まれるのに對して、Obsolete Word は（對照的意味において取上げる場合を除き）考慮外に置いたのと同様の取扱いである。

Historical Sense を Actual Sense の中に入入れるのは（Living Language の使用及理解という面から云えば）、General Sense を直ちに Historical Sense と認定して事實の解釋を誤まるような變いをなくしようとする用意に出たものであるが Technical Sense の場合もこれと同じく、General Sense が直ちに Technical Sense として十分であるという速斷に陥らないためである。

（註17）もつとも上の場合と反對に或る専門分野の人が General Sense を Technical Sense に解釋すること（即ち Technical Sense を General Sense の上に不當に投影させること）は十分あり得ることである。たとえば、法律家が General Sense の satisfaction（満足）という語を、context（文脈）と不調和に、Technical Sense の「辨済義務の履行」と解するような場合がそれである。

今ここに極めて平凡な General Word である **failure** という言葉を例に取つて、企業經營についてのその Technical Sense を考えよう。この場合 failure にはほゞ三つの段階があると考えられる。

- (i) the actual failure
- (ii) the recognition of failure
- (iii) the admission of failure

（註18）卑俗な言葉で言えば次のようになる。

- (i) 左前になること
- (ii) 左前になつたのに氣付くこと
- (iii) 債權者に手を舉げること

ここに云う failure は一應 insolvency（債務履行の不可能）という意味に解してよいであろうが、その **insolvenay** という語を technically に検討すれば、合衆國の Uniform Sales Act によれば債務者が營業上順當に（in the ordinary course of business）債務の支拂いをすることを止めた場合、または支拂期日が來ても債務を果たし得ない場合を指し、また同國の Bankruptcy Act によれば債務者の有する資産の總額が、公正なる評價において、その負債を支拂うに足らぬ場合をさす。従つてこの兩法において、insolvency の内容にはかなりの相違がある。

更に數例を加えると“want of consideration”は General Sense では「思いやりのないこと」を意味するが、法律語をしては「對價の提供がないこと」を意味し、同じく法律語としては“criminal conversation”は「姦通罪」を意味する。“realization”という言葉は株式市場では

「利食いする (= to cash in) こと」を意味し、不動産賣買に関しては、「金を不動産 (real estate) に變えること」を意味する。remedy という言葉は法律上の用語としては「損害賠償 (legal reparation)」を意味し、貨幣鑄造に關して用いば「公差 (= tolerance)」を意味する。

(註19) 更に文學的な用法としては、Thomas Hardy の Desperate Remedies においては「死」を暗示する言葉として “remedy” を用いている。

このような **Technical Sense** に對し、次のような言葉は **Technical Words** であつて、これらの言葉は一見して **General Word** でないことが明白であり、言葉自身の中にその technicality について用意ある態度を取らせる要因を含んでおり、これに對する General Word としての解釋は普通に存在しておらず、従つてそれを直ちに宛てはめるというような危險は先ず無いものと見てよいであろう。

henotheism [宗教] 統神教 (多神の中に特に一神を尊ぶ信仰。多神教から一神教に移る中間過程)

transubstantiation [基督教] 化肉説。化体説。

existentialism [哲學, 文學] 實存主義。

fission [生物] 分体 [岩石] 剝離 [物理] 核分裂。

isotope [物理] 同位元素。

metabolism [生物, 化學] 新陳代謝

catalyser [化學] 觸媒

emulsion [化學] 乳劑

schizophrenia [醫學] 精神分裂症

Oedipus complex [精神分析] 異性親を慕い同性親を斥ける傾向

antibiotic [醫學, 藥學] 抗生物質

lobectomy [醫學] 肺葉切除術

vagus [解剖] 迷走神經

parasympathetic nerve [解剖] 副交感神經

toxicity [藥學] 毒性

aseptic [細菌] 無菌の

non-ferrous [金屬] 非鐵の

cam [機械] 偏突輪, カム

manday [勞働] 工數 (延人員)

tort [法律] 私犯

estoppel [法律] 禁反言

co-respondent [法律] 離訴訟における共同被告 (= joint respondent)

mortgagee [法律] 抵當權者

Eminent Domain [法律] 土地收用權 (國際法および米國法において)



Knight Hospitallers [歴史] (十字軍時代の) 病院武士團

scutage [歴史] 非武士借地法

gabelle [歴史] (フランス革命以前の) 塩税

anapaest [文學] 弱弱強脚

the Ah-ness of things [文學] 物のあわれ

pillow word [文學] 枕言葉

pivot [文學] 懸言葉

polygyny [社會] 一夫多妻 (polygamy では一妻多夫の場合をも含むので特に區別するために用いる)

contango [株式] 順日歩, 先高

bye [競技] 不戦一勝の人 (又は組)

(註20) Technical Word の中に [文學] として採録した語と、先に (IV) の (註8) の中に Literary Word と名付けた Word とを大体の上から區別すれば、前者は文學の研究において用いられる術語であつて、従つて文學という分野を細分すれば anapaest は [韻律學], the Ah-ness of things 以下の 3 items は [日本文學] とするのが適當となる。更にその中で最後の 2 items (pillow word, pivot word) は見方によつては [日本語學] とすべき場合も當然起つて来る。

これに反して後者 (Literary Word) は “seeing and hearing public” (即ち radio, television, talkies に親しむ程には讀書に親しまない一般人) に對する意味での reading public (即ち東洋風に言えば「書奥を帯びた人々」) の間において使用 (もしくは少くとも理解) される語である。

前者と後者とは互に重り合う部面もあつて必ずしも區別し難いが、その間に見方の相違があることは前述の通りである。範圍の上から言えば、前者はその性質上當然 reading public の言葉であるから、大体後者の中に包含されるもので見て良いであろうが、その中餘りに technical なものは一般讀書階級の理解を超えるものもある。

こうした Technical Word も、夫々の分野の人に取つては General Word に準ずる性質を持つことは前に (IV) の (註8) に述べた通りであり、また或る専門分野に關する特殊な知識が次第に general information となると共に、それに関する Special Word もまた General Word の category に入る。米國において psychiatry の流行と共に psycho-analysis の用語が知識階級の日常會話にも頻出するに至つたことはその一例である。

換言すれば Technical Word と General Word とを區別する規準は (Usage に關する多くの問題と同様に) 全く相對的なものであり、時と所によつて變化するものである。

(註21) また或る分野での Technical Word が他の分野に應用される例は珍しくない。例えば

amphibian [動物] 兩棲類の

[兵器] 水陸兩用の、また名詞化して「水陸兩用戦車または飛行機」

のような場合である。更にまた Technical Word が比喩的に用いられ、次に説く Figurative Sense を獲得する場合もある。例えば ganglion (神經節) という語が「活動の中心 (=centre of activity)」という意

味に用いられる場合などがこれに當る。この場合においても“ganglion”に對して少くとも或る漠然たる認識が存在することを前提とする。

なお General Word が combine されて出来る Technical Terms は Technical Sense と  
言う面から取扱うこととしたい。

### (VIII) Figurative Sense と Technical Sense

多くの言葉は denotation (當面の定義) と共に connotation (隨伴的な意味) を有する。  
そうした connotation は種々の連想作用、殊に修辭學でいう figures of speech (言葉のあや)  
から生れるものが多い。ここには metaphor, metonymy, synecdoche, litotes, meosis, eu-  
phemism, hyperbole 等々の figures についての説明は省略し、そうした修辭的要求から生れる  
意味の擴大、縮小と、(VI) に述べた Technical Sense と對比し、その間の相違を示唆するに止  
めよう。たとえば

throne が King

fur and feather が beasts and birds

の意味に用いられ (以上 metonymy の例),

rhyme が poetry

blade が sword

bottom が ship

の意味に用られ (以上 synecdoche の例),

that extremity (又は the other place) が hell

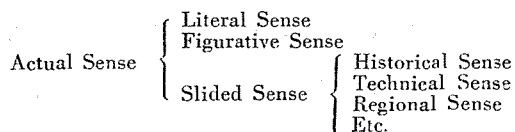
to be no more が to be dead

の意味に用いられる (以上 euphemism の例)。

かようなものが Rhetorical な用法である。

(註22) 普通に、言葉の「文字通りの意味」(Literal Sense) と「比喩的な意味」(Figurative Sense) と  
を對置するが、Literal でない Sense が必ずしもすべて Figurative Sense であるとは言われない。

この點を Actual Sense の見地から見れば次のような分類が可能であろう。



“Slided Sense” というような呼び方はやや奇異の感を与えるかも知れないが、往々用いられる Slant と  
いうような言葉では 變化した所の語義そのものを表わすに不適當であり、Changed Sense, Altered Sense  
では餘りにも多く本質的な變化を感じしめる。Expanded Sense, Shifted Sense という呼び方も考えられ  
るが、「Literal Sense における本質を失つてしまうことなく、しかも多少のズレを示している Sense」とい

う意味で、あえて Slided Sense という名称を用いた。Figurative Sense を Slided Sense の中に含めることも出来るが、比喩の対象とするものは同一であつても、比喩の結果として生れる意味は根本的に變化する場合が多いので別個の取扱いを適當と考えた。

こうした Figurative Sense に對し、Technical Sense と認め得るものを次に與げよう。例えば

(a) **Danelaw** が “England における Danes の 征服地 に 施行された法” の意味から “Danelaw の行われた、Watling Street 東北の地域” という新しい意義を加え

(b) **assign** が “heirs and assigns” の用例に見るように assignee (被讓渡者) の意味をも附加し、**infant** が未成年者の意味に用いられ

(c) **order, contract** が夫々「注文」「契約」の意味から更に「注文品」「契約品」の意味に、また **this quality** が「この品質の品」、**connection** が「取引先」、**prospect** が prospective buyer の意味に用いられ

(d) **reservation** が權利などの「保留」、座席、部屋などの「豫約」の意味から、“the Maori reservation” などのように特別保護のための「指定居住地」の意味に用いられ

(e) **turnover** が營業上の「回轉」から、顧客などの顔ぶれの「入れ替り」(the usual turnover などの用例における)や、労働者の「移動」(= labour turnover), 或は会社の「浮沈」「隆替」(fifty years' turnover among 100 big corporations など)にも轉用され、また株式取引所の用語としては「買賣の行われた株種の、上場株全体に對する比率」の意味に用いられるような諸例。

(註23) 此所で一寸觸れて置きたいのは、或る General Word の Special Senses の中で、孰れが先に起つたかということの決定は困難なことが寧ろ普通であるということである。 **race** という語が 酒の「コク」に用いられ、また文章の「風趣」にも用いられるのは恐らく前者が先であろう。 **digest** という語では、systematize, classify という意味の方が先で (Justinianus Codex の Digesta), 胃腸によつて「消化する」意味の方が却つて轉義となつている。これに反して **incidence** という語の場合には、falling (upon) という General Sense を持つこの語が、別個の二つの分野に應用されて〔物理〕入射、〔經濟〕課税の範圍 という Technical Senses を得たもの言うべきであろう。その前後は容易に定め難い。

(f) **fatigues** が「作業衣」、**comics** が「漫畫」、**durables** が「耐久財」、**perishables** が「腐敗物」、**futures** が「先物」、**spots** が「現物」、**seconds** 「二級品」或は「等外品、不合格品」、**strip** (= metal strip) が「延板」、**prefabrication** (略して **prefab**) が「組立家屋」の意味に用いられるような諸例。

(g) 新聞語としての **coverage** (取材)、**lead** (記事の「書き出し」) **beat** (擔當區域——この語は警察關係にも用いる)。

(h) 映畫の用語としての **continuity** (台本), 演劇の用語としての **property** (小道具), **blackout** (舞台の暗轉) などみな事實の裏付けが語義の變化に大きく作用したと見るべきであろう。なお blackout が「燈火管制」「停電」「急降下中の一時的失神 (pilot blackout)」などの意味に用いられ、また **austerity** が特に英國の「耐乏生活」を意味するようになったのも、戦争下の特殊事情や、戦後の經濟恢復に伴う生活の厳しさを背景としている。

(註24) **austerity** という語は嘗ては宗教的な implication を以て asceticism (特に auterities と pl. にして ascetic practices) の意に用いることがより一般的であつた。

(i) **adjuster** (= average adjuster) が「海損清算人」の意味に、**packer** (Chicago packers など) が「罐詰業者」の意味に、**classer** が「綿花又は羊毛の格付けをする熟練者」の意味に、**exterminator** が鼠取り屋 (= rodents exterminator) 又は南京虫退治屋 (insects exterminator) の意味に用いられるのは廣い意味での Technical Sense の部類に入るであろう。これに反して **undertaker** が「葬儀屋」の意味に用いられるのは、或る field の言葉と見るにはやゝ一般化し過ぎてゐる觀があり、またこの場合の意味限定の動因も恐らくは euphemism (婉曲法) であると考えられる。

(j) **japan** が漆器を(時にはまた「うるし」や「日本風の細工物」をも)意味し、**china** が磁器を意味するのは物産の産出國の名が物産の名に轉じた例である。**mocha** が Moka 産のコーヒーを意味している限りにおいては Technical Sense としての變化の程度は前二者に及ばない。**Nile** (フランス風に Nil と書くこともある) は色彩に関してはパステル・カラーの淡緑包(うすば色)を意味し、この名は Nile 河上流の水の色から出たものといわれるが、fancy name という感じもある。**Manhattan** (cocktail) などは明かに fancy name といえよう。

(k) **Semitic** という形容詞が(特に米國で) Jewish の意味に用いられるのも euphemism の結果と言われなくはないが、それよりも歐米兩大陸に亘る Anti-Semitism に伴う社會的事實が多く關係していると見方をすれば廣義の Technical Use に屬せしめるべきであろう。

これに反して **disease** (= lack of ease) という言葉が「所勞」というような軽い意味から「特定の症狀を示す程度、やゝ重い病氣」というような含みを持つようになり、また英米において「ソビエトと氣脈を通じ易い」という意味で “**unstable**” という言葉を用いるような例は euphemism の氣味合いが多いように感ぜられる。

(l) 同じ言葉が Figurative Sense と Technical Sense とを相並んで發達させている場合はもとより多い。例えば **attachment** という語は「附着」の原意から一面では「愛着」の意となり、他面では機械などの「附屬裝置」を意味し、また法律上「差押え」「引致(またはその令狀)」を意味して用いられる。

(m) 同様の例として **nursery** を挙げる事が出来よう。この語は恐らく「育児室」を原意としたであろうが、「養成所」という意味に用いれば一種の Figurative Sense と見得るであろうし、「苗木場」「養殖場」「養魚場」などの用法では、むしろ Technical Sense の傾向が多いものと言えるであろう。

商業関係の言葉では、**quotation** が「相場、時價」、**limit** が「指値」、**acceptance** が「引受手形」または「(爲替銀行の) 外貨の豫約」、**cable** が「電報爲替」、**credit** が「信用狀」、**commercial** が「廣告報送」を意味し、また更に特殊な例では皮革類 (hides) の賣買に関しては **briar** が「かき傷」を意味するような諸例においては、その背景にある事實が意義變化の最も直接な要因となつている點で、Rhetorical な變化とは全く趣を異にしている。

勿論この點に関しては多くの borderline case も考えられるが要するに、大体において Figurative Sense はそれが一般化する爲には比喩の motive となる着想が多くの人によつて是認されるものであることを必要とするので、その關係上語義の展開が比較自然であることを普通とする。これに反して外的な事實關係に基づく語義變化には偶然的な要素が多い。このことは特に Technical Sense において著しく、従つて Actual Sense の問題を取扱うに當つて特に力を注がなければならぬのは Technical Sense である。

のみならず、一般に語義の研究において最も取り残されているのは、ここに云う Technical Sense である。その研究は結局体系的なものとなり得る見込は少く、かつ言葉の historical development と無關係に、云わば逆立ちの形で進めて行かねばならぬので、自重心に富む學者が之に携わるのを好まないのは或意味では無理のない所である。

(註25) 或る意味で borderline case に近い若干の例について少しく布演すれば、英國で luggage-man (手荷物係) というのに對し、米國で baggage-man というのは地方的な相違であるが、更にこれが baggage-smasher となつた場合、米國の手荷物係が特に手荒いという「事實關係」に基づくものと見るのは餘りに酷で、むしろ米人の playful な物の見方から生れた「輕口」と見るべきであろう。

gate-crusher を uninvited guest の意味に用いるのは、playful な點でこれに似ているが、誇張的な面が一層著しく現われ、事實との接觸が愈々少くなつている點でむしろ Figurative Sense に屬する。またやや特殊な例であるが、「迎え酒」を意味する “the hair of the dog” は、元來は the hair of the dog that bit one を省略したもので、犬や狼に噛まれた傷はその犬又は狼の毛を食べば輕快になるという迷信に基づくものである。「迷信」はそれが行われている限りにおいて「事實」に準ずるものであるが、この場合には更にそれが酒に轉用されて、宿醉 (hangover) を飲み直すための「迎え酒」の意味に用いられているので、當然 Figurative Sense に屬する。

## (IX) Regional Study

さきに (VI) において「時」に對し「所」を考えるに當つて、便宜上その「ところ」を専門的分野、又は特定の活動分野の意味に限定したが、これは當然更に別の意味での擴がりを持つべきもので、その最も重要なものは、言うまでもなく、地域的な擴がりである。そうした擴大の内容が語義のみに關係している限りにおいては、**Regional Sense** という見方を以て律し得るが、地域の擴大ということは取りも直さず、研究の對象として、より大きな「自然」を取入れ、またより廣い地域に亘る「人間の活動」を取入れることになるので、單に Sense の問題を超えて **Regional Word** を對象とせねばならぬ場合も起り〔(1) 及 (註2) 參照〕他面においては言葉よりも「事がら」に依據する度合が益々大きくなる。たとえば英米間の regional differences (地域的相違) を問題にする場合、焦點を言葉に合わせて假に

〔米〕 corn = 〔英〕 maize

〔米〕 cow-catcher = 〔英〕 plough (or life-guard)

という對立を考えて見ても、それは單に

〔米〕 casket = 〔英〕 coffin

という言葉の上だけの相違と同一 level では見難い所の regional difference の背景を感じさせるものがある。

(註26) corn には穀物 (cereal) の汎稱としての用法もあるが England では wheat の特稱となる。大体この言葉は地方的にはその土地の主要穀物を指すものと考えられ、従つて Scotland では oat, 合衆國では Indian corn の略稱として「とうもろこし」を指す (American Indians にとつては maize が主要穀物であつた)。England の用法ではこの「とうもろこし」に當るのは maize である。合衆國で刊行される歴史の教科書で英國の Corn Law 撤廢などに関して記述してある場合には、「この corn は wheat の意味であつて、maize の意味ではない」と特に斷つてあるのを見る。

汽車の「除障機」を意味する米語 cowcatcher はアメリカの雄大な自然と急速に行われた鐵道の布設とを思わせるものがある。これに對する英語は plough であるが、また life-guard とも言う。(米語では life-guard は「水泳場の見張り人」の意味に用いられるが、「護衛者」の意味では英米共通である)

こうした regional な相違は或る意味で英米兩國間に「同文の悩み」を生ぜしめる。序ながら全くの餘談であるが、本學の前身大阪外國語學校のロシア語教官であつたネフスキー氏が昭和の初年中國から書籍を取り寄せたところ、その宛名に「大阪外國語學校裏」と書いてあつたので、配達夫はいま大阪市の公園になつている。當時小家屋の密集していた學校の裏通りを尋ね歩いたため大いに遲延を來したことがあつた。説明するまでもなく「裏」は「裡」と同じく、「内」すなわち「氣付」を意味するものであつた。「同文の悩み」の一例としてつけ加えた。

地域ということの問題にする以上、國を異にする場合には限らず、同一國內における variation も考えなければならない。殊に合衆國やカナダのような廣い國で、しかも地方的に沿革を

異にしている場合においては尙更である。

そうした同じ language の内部での variation よりも一層大きい混乱は二つ以上の國語が交差する場合の相互理解に關して起り易い。

(註27) 引例としてはあまり適切でないかも知れないが、ここに米語とドイツ語と更に日本の「物」とが交差した實例を挙げよう。a Japanese napkin といへば a paper napkin を意味することは、餘り一般的でないかも知れないが、O. Henry にもその用例が見えて請るので、一應 American usage として良いであろう。ところで Japanese napkin に當るドイツ語の die japanische Serviette は何を意味するか？ 學報の品位の上からいささか恐縮であるが、次の實話はこの答えている。ある日本人がドイツ滞在中、越中フンドシを洗濯に出した。しかるにドイツの洗濯屋はその物のたちが分らない。そこでともかく恭しく洗い上げてカチカチに糊づけをし、送り返して來た 包紙の表面に書いた言葉が他ならぬ die japanische Serviette であつた！

序ながら英語—獨逸語の間において語源を同じくする Word の意味の食違ひの例を二三挙げると Warenhaus は必ずしも英語の warehouse とは限らず、また department store をも意味し、Konversations-Lexikon は conversation とは何等直接の關係のない encyclopedia である。

また獨逸語の Gift は「贈物」の意味では英獨共通であるが (Mitgift 「持參金」など)、現在の用例ではむしろ「毒」を意味することが多い (ただし前の意味では女性、後の意味では中性)。これは危険な「贈物」がやり取りせられた油斷のならぬ近世の初期を經過する間に起つた意味變化と見てよいであろう。

今かりに、日本語—英語の關係においていへば、被服材料に對し、捺染模様としての “spot design”，織模様 (または特殊捺染加工) による “moss design” は、それぞれ日本語で「水玉模様」および「梨地」と稱せられ、この場合日本語、英語ともに、言葉がよく design の特徴を言い表わしているので混乱は比較的少いと思われる。しかしながらこうした幸福な状態は決して多くの場合に期待出来ない。

次に借用語の場合および譯語において混乱の起り易い例を二三掲げよう。

(a) **buyer** という英語はあらゆる買手を意味するが、日本語としてのバイヤーは外國の輸入商 (殊に訪日の外國輸入商) に用いられる。なお商業上で某々 Co. の buyer という場合には「仕入係」の意味となることが多いが、この用法では實際上日本語でいうバイヤーに近いものとなる。

(b) **service** という言葉は General Use ではあらゆる「奉仕」「勤務」「勞務提供」を意味する。Diplomatic Service といへば「外務省」、the services といへば多くの場合は「陸海空軍」、Selective Service System (S. S. S.) は米國の徴兵法、また電氣通信關係で paid service advice といへば「課金事務報」の意味で、すなわちこの service は telegraphic service を指す。これに對し、日本語で「サービス」というと、種々の nuance をもつた「サービス満點」の意味の「サービス」の外に、「サービス品」などの用例では時として「お添え物」の意味に用いることが多い。

(c) **building** という語は英語としてあらゆる建物を意味し、住宅もそこに含まれるが、日本でビルディングといえは、階層のある不燃性の建物を云うのが普通になっている。

(d) **professional**. この言葉は英語としては (1) professional skill, professional attitude といった場合のように、「本職の」とか、「如何にも板に着いた」という意味、(2) professional men のように「知的職業に従事する」の意味又は (3) amateur と反対に「生計の手段とするの」意味に用いるのが普通である。しかし日本語でプロフェッショナルといえは運動競技に関連して (3) の意味に用いるのが殆んどすべてと言つてよく、殊に (2) の意味は全く念頭に上らないのが普通である。これは semi-professional についても同様である。

(e) **back to back L/C** といえは日本ではパーター取引の決済を目的とする「同時開設信用状」を意味するが、合衆國の用例では多くは外國の輸入商によつて開設された信用状を見返りとして國內で開設する ancillary L/C (= local L/C) を意味する。(Pratt: Foreign Trade Handbook, P. 556). 従つてこの種の L/C は原 L/C が譲渡を認めていない場合に合衆國の銀行が自國の輸出業を助けるために開設するものである。(Rosenthal: Techniques of International Trade, P. 371—372)

(f) 紡績の用語としての **left hand twist** は日本では「右捻り」、**right hand twist** は「左捻り」と稱え直譯の正反對になる(渡邊喜作氏: 綿糸布の基礎知識)。このことは yarn (捻り糸) だけではなく wire-rope などについても同様であつて、この食違ひに基ずく誤解が過去において重大なクレームの對象となつた事例もある(“Trade & English” No. 5)。

(g) **receiver** という言葉は General Sense では「受領者」(= recipient), 容器 (= receptacle), 「受信機」「受話器」を意味し、やや特殊化した用法としては「收入官吏」を意味し、更に特殊な用法としては「故買者」(= fence) を意味するが、ここで問題としようとするのは裁判所の receiving-order による receiver (英國流には屢々 official receiver と呼ばれる) である。英和辭典では従前屢々「破産管財人」という譯語を與えていたが、日本の破産法による制度を前提としては、次のような英文は(少し強い言葉で言えは)不可解であらう。

Failure to pay interest on bonds may precipitate bankruptcy or receivership.

「社債の利子支拂いが滞つた時は直ちに破産または receivership の事態を引起すことがある」

すなわちここにいう receiver は equity receiver (衡平法上の管理人) を意味するものであるが、日本の制度による破産管財人は bankruptcy receiver とほぼ一致し、これによれば破産の宣告と管財人の任命とは一連の事實であり、その間に “or” (もしくは) という言葉を用いて、これを別種(二者擇一的)のものとして取扱う根據は存在しない。英語—日本語の間におけるこ



の矛盾は昭和二十七年六月七日法律第七十二號として公布された「會社更生法」によつて、ある程度まで解消された。

(註28) 同法は極めて大ざつばに言えば米國法の equity receivership (衡平法上の管理) の精神を取入れ、連邦破産法や英國の會社法 (The Companies Act, 1948) を参考として制定された強度の強制和議の性質を有する法律であつて、一旦窮狀に陥つた事業でも再建の見込のある限りはこれを整理の段階において更生させることを目的とするものである。(位野本益雄氏：會社更生法要説)

そこで上記の場合において “enter into receivership” は現在の日本の法制の下においては、ほぼ「會社更生法の適用を受ける」ということに近い内容を持つ。

言葉の意味を正確に捕えるために、その言葉に関連のある各地域における **Realien** (實物、實狀) の認識が屢々必要であり、これをおし廣めると **Area Study** (Regional Study) に發展し、

Language + { Nature Culture
--------------------------------

という内容を持つこととなる。

**Regional Study** において特に困難な場合の一つは、言葉が理念の世界を出て 實物と對決する時であろう。多くの英和辭書に

**plum** [名] 李の類

**nightingale** [名] ナイテングール (つぐみ科の候鳥) という風な記述があるのはこの困難を證據出ている。殊に實物または用語の上での地方的差異に特殊な field (分野) での Technical Use が結びつく一層複雑なものとなる。

たとえば捺染 (textile printing) 關係の **back gray** とか、**cut clear** というような用語は、この業界の特殊な用法と米國の造語法が重なり合つたという感じが深い。前者は機械捺染の blanket の上に用いる敷布 (しきぬの) (英國流には通常 undercloth という) であり、後者は顔料 (pigment) を稀釋するための溶劑 (diluting solvent) である。

(註29) cut clear については、その稀釋の率を%で表わさず 1:5 という風な比例で表わすのが普通である。なお cut clear というような用例は General Sense との開きが餘りに多いので Technical Sense の中でも (B) に屬せしむべきだ (IV. Actual Sense 参照) という見方、或は更に一步を進めて、clear という語には通常名詞用法が無いので、名詞的に用いられた clear という語は General Word のワケ外に出て、Technical Word として扱うべきだと云う見方も成立し得る。

更に貿易上の商品の名稱やその標記法に至つては、學説は勿論、諸外國の關稅法や判例にも拘束されるので、その複雑多岐なことは一通りでない。嘗て日本産の鰯罐詰に “Sardine” と標記して南阿に積送したところ、税關で押收せられ、幾多の手數と費用をかけてこの標記を抹消して

辛うじて輸入を許された事例がある。(中井省三氏：最近貿易業務論)

(註30) 元來 Sardine の名稱はもと イタリア、フランス 近海に漁獲される學名を *Clupea Pilchardus* という魚のみに限られ、これに對してアメリカ太平洋岸、ニュージランド、及び日本産の鰯は學名を *Clupea Sagax* というが、習性において大差はない。しかしながら、例えば濠洲の商品標記法では、單に “Sa dine” とのみ標記すれば前記歐洲産の *Clupea Pilchardus* の幼魚に限られ、成魚は “Pilchard” と標記すること、また他地方で産出する鰯はこれを “Sardina Sagas of Caltifornia” “Sardina Sagas of Japan” などと標記することを要求している。

## (X) 結 語

事新しく言うまでもなく、外國語は外國の人間と自然を基盤とする外國文化の中に成育したもので、その文化一般と密接不離の關係を有し、その關連においてのみ正しい理解を望み得るものである。

従つて Living English の修得に當つても英語の純粹に語學的な面だけでは十分にその目的を達することが出来ない。語および語義という觀點から言つて少くとも次のような目標を持たなければならない。

(i) General Word の中特に効率の高いものについてはその “Actual Sense” を把握して之を使用し得ること

(ii) 英語の行われる地域の文物および自然について、その大体を知ること

(iii) 自己の屬する分野の Technical Word (また General Word についてはその分野の Technical Sense) の、量的にも質的にも十分な知識および使用上の技能を体得すること

(iv) Living language の研究を専門とするものにあつては廣く各界各分野における Actual Senses につき居常注意を怠らず、特に Special Sense に對する知識を増すと共に、未知の語義に對してもその General Sense からの「ずれ」(shift)を鋭敏に感じ得るように語感を磨くこと

(註31) たとえば Business English においては、Business という一つの分野においてこの事が目標とされている。Business English が逸早く “General Word の General Sense” というワクからはみ出して、Actual Sense の探究、克服、ならびに Special Word の修得、應用という方面への分化 (differentiation) を示したのは偏にその緊要性のためと見るべきであらう。

(ii) に關連しては、ハーバート大學のライシャワー博士やフエアバンク博士が「Area Study は知識を得るということよりも知識を得る方法を修得することに重きを置く」という主旨め述べたことが思い出されるが、事柄の性質上誠に當然と言わねばならない。こうした態度はまた (iv) の場合 Technical Sense に對する態度としても妥當するものと云えるであらう。

語學修得の初歩的な段階における便宜的な方法として、事柄を簡單にするために或る點で抽象

化を行い努力の集中を計るということは、十分理解し得ることであるが、究極的には **“Actual Sense”** の研究が必ず随伴し、實物、實狀への適用の必要に迫られることは、**Living English** の遁れ得ない運命である。

このような見方に對して（特に (iv) のような主張に對して）、「それは語學以外のものを語學に合体させようとするもので、實際的のように見えて却つて迂遠、空想的な考えである」と冷笑する人のあることは容易に想像し得る。

しかしながら難きが故に直ちに避けようとするのは一種の defeatism である。一人で出来ないことも多くの人の協力で成し遂げられる。多くの學問に對して語學が補助學科としての役目を果たす如く、**Living Language** の研究のために凡百の科學、藝術、或は各種の活動分野に關する知識をその向々の専門書に求め、専門家に質し、或は積極的な援助を求めることも出来る筈である。大規模な辭書の編纂等に關しては現に或る程度までこのことが行われている。

筆者は上に云つたような冷笑者の冷笑の權利を否定するものではない。たゞ事實の正確な認識は人類社會進歩の基礎であること、および言語と現實の事物との對決、融合は自國語、外國語を通じて常に何等かの形で行われており、將來も行われなければならないという平凡な主張については何等譲る必要を認めない。